

## 春芽増収のための刈取りまでの管理について②

R5.9 アグリ技研(株)

目標	①養分転流時期まで茎葉（緑）を維持する（草勢・吸収根の維持）。「 <b>光合成の活性化</b> 」										
	②秋芽の収穫打ち切りを早くする（暖秋で遅くまで収穫すると春芽は減収傾向）。「 <b>秋の強制休眠管理</b> 」										
	③褐斑や斑点病の対策は、防除と灌水調整で後半の蔓延抑制。「 <b>天井ビニールのクリーニング作業</b> 」										
時期	10月			11月			12月			1月	
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬
管理	≪養分転流時期の活発化に3～5日前後で十分な灌水≫										
	生産量に応じた追肥			止肥（その後は液肥で対応）			（茎葉の緑色時まで追肥・刈取り30日前）				
	* 養分転流対策（最低気温10℃前後からPKゴー2000倍で3回葉面処理）										
ポイント	・ 止肥（袋物）の時期を明確にして追肥は、刈取り前30日として多年生株で12上～中旬までとする。										
	・ 止肥（袋物）は、遅効性肥料の「 <b>味太郎</b> 」3袋、 <b>珪リン酸2袋</b> を畝上全面施肥して十分な灌水を行う。										
	・ 止肥後も灌水時に液肥（ <b>10日置きにウルル10号・30kg</b> ）を混入して刈取りまで施用する（吸収根の活性化）。										
	・ 灌水は刈取り直前まで3～5日間隔で十分に行う（糖分を貯蔵根へ転流作用）。										
	・ 養分転流促進は、最低気温10℃前後になり最盛期 <b>PKゴー2000倍</b> の処理（葉面散布若しくは灌水処理）。										
肥料吸収の動き	◎収穫中は 吸収根⇒⇒貯蔵根⇒⇒茎葉（光合成）⇒⇒若茎（収穫茎）に										
	◎収穫後半～終了後は 吸収根⇒⇒貯蔵根⇒⇒春芽のための養分蓄積糖分に										

夏場は猛暑で推移をして来ました。今後の予報でも高温多湿傾向の様であり問題は、気温が高く推移することにより養分蓄積の期間が短くなり、養分蓄積不足となり春芽の収量まで影響しますので後半の十分な管理と地上部の刈取作業を遅くするなどの作業管理（十分な休眠と打破）などを厳守することこそ春芽増収の近道と思われます。